

器物破損ではなく粗相と見なされし出来事を拭ひ塩

素を撒きぬ

小川真理子

たぶん生徒が暴れて、校舎内の便器か何かを壊したのである。それを事件ではなく、日常的なトラブルとして穏便に処理した場面らしい。今月の作、一教師として、教育現場の現状を切実に思う注目作。

噴くごとく吾亦紅暗し幾晩も殺す場面に葉をはさむ

岸並千珠子

毎晩、本を読むように自分を読んで、自分で自分が恐ろしくなる、そんな日々を表現しているのだろう。抽象的すぎて一首だけではインパクトがないが、何首か並べて連作のかたちにすれば、立ちあがる一首と思う。

鉄道と航路を使ひ上京す頭を垂れる稻穂を残し

松本秀一

なんとななくクラシックな感じが魅力的な一首。なぜどこがクラシックなのか。よく分からぬが、「鉄道」「航路」「上京」といったボキャブラリーが、現在はあまり使わなくなっているからだろうか。

「広島市安佐南区」に住みたるは自転車に乗らぬ四年であった

鈴木陽美

土砂災害で一躍有名になつた広島の安佐南区である。突然のニュースでスポットライトを当てられた自身の過去。安佐南区は、山に近く坂が急な地域なのだ。こういう時事詠もある。

生きてゐる大儀大儀と鍬を杖に秋蒔き野菜の諸々蒔

田中江子

けり

初句切れである。「大儀大儀！」とつぶやきながらも、生きる楽しみに野菜の種を蒔いている。作者の正確な年齢を知らないが、九十年代だろうと思う。この作者は、夫君・田中長三氏とともに「心の花」の戦中からの古参会員である。佐佐木信綱、伊藤嘉夫らが戦傷兵に作歌指導をしていたころに会員になれたと聞いている。

わがままな息子が潰す九条か夾竹桃が火を噴く国に

鳥山順子

作中の「息子」は、この一首だけ読むと、安倍晋三首相をはじめとする現役の政治家を比喩的に指すが、この作の前に「吾娘」の歌があるために、今月の一連六首の中では自分の息子のようにも読める。そんな構成的なアイディアに注目した。

傘の内に入り来るかをり夜の雨に金木犀の花は散りにき

後藤秀彦

金木犀の歌として読めるし、もちろんその読みでいいのだが、今月の一連の中で読むと、三十歳で死去した若き友人への挽歌とも読めるようになつてゐる。第一・二句がうまい。

貴婦人の白き喉より良き声の聞こえきて絵に耳澄ましをり

梅原ひろみ

「絵に耳澄ましをり」は一読やや分かりにくいが、美術館で貴婦人が描かれた絵を見ている場面を思い浮かべれば、よく分かる。「貴婦人」という非日常語を使つて

短歌の現在

No.405 今月の15首を読む
佐佐木幸綱